



## 国際交流研究 2006年度東アジア建築学術交流セミナーの報告

富井 正憲\*

### Report: Architectural Joint Seminar of the Five Asian Universities Theme: The Cityscapes of Asian Cities and the Architectural Education

Masanori TOMII\*

「はじめに」;

韓国成均館大学校との理工系学術交流がスタートしたのは2003年度のことである。当時の西久保工学部長のもと、中長期的観点で両校の建設的な学術交流を推進することを目的に、工学部と理学部によって成均館大学理工系学術交流実行委員会が組織され、初年度2003年は神奈川大学の化学系教員が韓国に出かけ、第1回目のジョイントシンポジウムが開催された。そして翌2004年度は成均館大の化学系教員が来日することになり、7月に横浜で第2回目が開催された。

こうした実績を踏まえて、2004年度から成均館大学学術交流委員会は工学部長、理学部長のワーキンググループとして改めて位置づけられ、活動を引き続けることになった。その年度初めの4月の実行委員会において次年度のシンポジウムの計画が募集され、すぐさま建築系が応募した。その後、他の分野からの申し出がなかったために第3回目のシンポジウムは建築系が行うことで承認された。この決定を受けて建築学科では具体的準備を開始し、成均館大側とも相談の結果、2005年度は韓国において建築デザイン歴史分野で行うことを決めた。その後両校の運営委員の選出があり、幹事を中心にシンポジウムのタイトル、内容、参加者、開催期日、費用等の確認と詳細を取り決め、2005年2月に計画書を作成して学科承認手続きに入った。その後運営委員長から工学部長、学長補佐への説明を経て、工学部長と連名のもと計画書を学長室に提出した。この申請承認手続きの流れは過去2回と大きく異なった。従来の手続きとしては計画書を成均館大学校理工系学術交流実行委員会に提出して、

学部長会で承認を得ると国際交流センターを窓口として作業が進んだのである。ところが2005年度から学内組織改革により国際交流センターが廃止され、経過処置として学長室で学術交流が取り扱われた。それまで国際交流センター長であった高橋志保彦教授は改めて学長補佐に任命され、引き続き国際交流業務を担当されることになったために、さほどのトラブルもなく改革前に決まっていた建築系の成均館大学校との交流計画手続きが進んだことは幸いなことであった。2005年度4月になって総合学術研究推進委員会が発足し、ここで学外機関との学術研究の交流が審議されることになり、学内で正式に成均館大学校での建築系の学術交流が承認されたのである。これを受けて両校の運営委員会では運営委員会を実行委員会に名称変更して、具体的な事項の立案に入り、教員同士の研究交流のほか、大学院を中心とした学生の参加交流を目的に加え、参加学生の募集と発表者、開催時期、調査対象地、宿泊所、費用等の検討に入った。こうして5月27日から31日まで韓国において「2005年度神奈川大・成均館大建築交流セミナー」が開催された。都市居住環境と建築デザイン教育をテーマに発表、フィールドワークを行い、両校の相互交流をはかり、学術面ばかりでなく、教育面においても大いに成果が得られた。因みに神奈川大学からの参加者は教員4名、大学院生10名、学部4年生14名(内車椅子対応者1名)の総勢28名であった。

2005年のセミナー終了後の懇談会において、交流が学術面ばかりでなく、教育面においても大いに成果が得られたので、来年はぜひ横浜で開催したいという双方からの申し出を確認し、帰国早々学科報告の中で次年度建築交流セミナーを横浜で行う提案を出し、承認を受けた。すぐに計画書作成の準備に入り、その検討過程のな

\* 専任講師 建築学科  
Lecturer, Dept. of Architecture

かで高橋学長補佐の助言を受けながら、2006年度は更に交流の対象を東アジアに拡大し、すでに神奈川大学と交流協定を結んでいる韓国（成均館大学校）、台湾（台湾科技大学）、中国（同济大学、武漢理工大学）と本学の5校により東アジア学術交流セミナーを開くことを模索した。5大学の既知の教員同士と緊密な確認を取り合いながら可能性を検討し、お互いの了解が取れた11月に西久保忠臣工学部長、室伏次郎準備委員会代表者連名で国際交流事業計画書を学長に申請した。その後ヒアリングを受け、幸いに年度末に採択結果をいただいた。実質的には成均館大学校理工系学術交流がスタートして4回目のシンポジウムにあたる。途中組織改革があり、担当窓口が変更して混乱することも多々あったが、西久保忠臣前工学部長と高橋志保彦前学長補佐の深い理解と強いバックアップのもとようやく実現までこぎつけることができた。

そして2006年度の東アジア建築学術交流は、教員の他に学生運営委員および留学生の参加も含めて、メインテーマを「東アジアにおける都市景観と建築デザイン教育」と決め、以下のようなスケジュールと内容で実施した。

7月5日：シンポジウム+学生作品発表

第1部「現代都市の状況と景観デザイン」

第2部「街並み保全と街づくり」

学生作品発表

7月6日：「建築デザイン教育について」

7月4日～7日：参加5大学卒業設計展

7月6日～15日都市建築フィールド・ワーク

参加者は

台湾：国立台湾科技大学 教員2名、学生4名

韓国：成均館大学校 教員3名、学生5名

中国：同济大学 教員1名

中国：武漢理工大学 教員1名、学生3名

と、海外より5大学5名の教員と12名の大学院生が参加し、会場は英語、中国語、韓国語、日本語がとびかった。

#### 『シンポジウム及び学生作品発表』

2006年のメイン・テーマは『東アジアにおける都市景観と建築デザイン教育』として最初に2つの主題による講演発表が行われた。第一主題はデザイン系の先生方が中心となって、アジアの中心的な都市である上海、ソウル、台北、横浜が取上げられ、景観の特質と今後の方向性等が報告された。次の第2主題においては歴史的な文脈における町づくりの具体的な興味ある事例が各国から取

り上げられた。司会者と各発表者及びテーマをあげれば以下の通りである。

第1主題：現代都市の状況と景観デザイン：司会 室伏次郎（神奈川大学）

高橋志保彦（神奈川大学名誉教授）：「現代都市の現状と景観デザイン」

金度中（成均館大学校）：「Making a Good City utilizing High Tech and Cultural Contents」

張尚武（同济大学）：「変化中的上海」

李威儀（台湾科技大学）：「An introduction on the change of urban image and country-scape in Taiwan」

第2主題：街並み保全と街づくり：司会 高木幹朗（神奈川大学）

西和夫（神奈川大学）：「町並み保全と町づくり」

慎重進（成均館大学校）：「韓国の住民参加まちづくり」

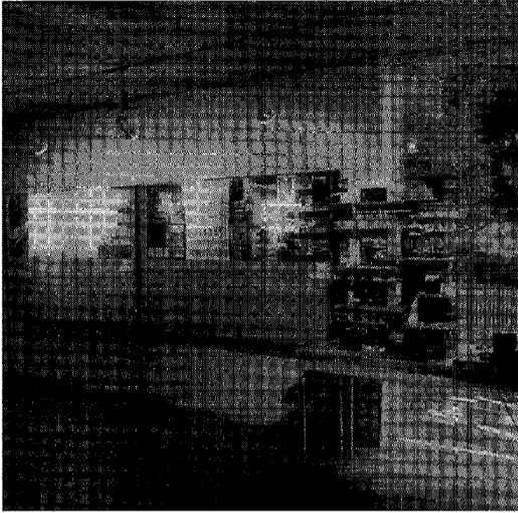
李白浩（武漢理工大学）：「Conservation and Adaptive Reuse of Industrial in Shanghai」

各国の報告を比較しながら聞くと、近年グローバリゼーションに伴い、都市は大きく変わりつつあり、特に東アジアにおいてはその傾向が顕著であることがよく理解できた。またグローバリゼーションはローカリティを浮かび上がらせる結果ともなっており、ローカリティを重要視する流れは、近代から引き継ぐ街並みを維持しようとする動きにも連動している。具体的に都市景観及びまちづくりにおける街並み保存の現状がとりあげられ、各都市の事例や街並み保存の手法等が紹介されて、内容は非常に興味深かった。特に日本においては本年6月に景観法が施行されたばかりであり、国内における関心が高いことと併せて、参加者の国々においても現在研究中ということもあり、相互に時宜を得たテーマとすることで情報の交換が盛んに行われた。

この後、引き続き曾我部昌史教授（神奈川大学）司会のもと、参加教員全員がコメンテーターとして、11名の学生作品発表が活発に行なわれた。学生作品は台湾科技大学、成均館大学校、同济大学、武漢理工大学がそれぞれ4作品、神奈川大学が2作品の合計18作品であった。昨年度英語で発表した成均館大の学生が、今年は日本語で発表するなど、中国、韓国の学生のプレゼンテーション能力の高さが昨年同様印象に残った。

これらの発表作品はシンポジウムを含む4日間16号館セレストホールのホワイトエに各大学A1サイズ4枚割当て構成したボードを作成展示して、学生や教職員の方々に公開した。また同時に出品作品はウェブ（<http://www.arch.kanagawa-u.ac.jp/2006asia/>）上でも公開し、活動をより広く外部に発信するとともに、今回

参加できなかった韓国、中国、台湾の学生達にも情報を流し、好評を博した。引き続き現在も公開しているので、学科ホームページをぜひご覧いただきたい。



セレストホールの作品展示風景

#### 『各国の建築デザイン教育に関する研究会』

7月6日午前中、海外参加大学の7名の先生全員と高橋名誉教授、および本学実行委員会主メンバー参加の元、室伏実行委員長の挨拶後、建築家教育の将来像について、東アジア各国の状況をお互いに把握することを大きな目的とし、具体的には建築家資格の国際相互認証の制度を話題に取上げ、デザイン教育の現況と課題について報告と質疑が活発に行われた。そして最後に来年度以降の本シンポジウムの予定や進め方についての意見交換が行われた。特にそのなかで取り上げられた各国の建築学5年制教育の問題は学部と大学院との問題、資格制度との関係等重要な内容を含んでいるのでここに具体的に紹介しておきたい。

①はじめに山家教授より日本の建築デザイン教育認定制度の現況と課題について、(a)JABEE(日本技術者教育認定機構及び)(b)ユネスコUIAとラウンドテーブル(c)大学院JABEEについて、資料にもとづき説明がされた。JABEEはわが国では2001年から認定が始まり、2003年度から建築分野でも制度化の動向にあったが、UIAとは起源と認定システムが異なることから、現在、特に大学院教育との関連で試行を模索している段階であり、両者の枠組みをどのように調和させるかが課題である旨、報告された。

②続いて本学建築学科のJABEE認定に関わった高木教授から、準備から認定にいたるプロセスの説明があり、審査概要とその結果についての説明があった。特にスタート時の「専門プログラム」と「教育プログラム」の併

置から、2006年度から「専門プログラム」に移行した旨の説明がされた。

③上記2者の説明に関連して海外のメンバーから質疑意見があった。

(a)台湾鄭教授から日本における認定制度を進めていく上で学部と大学院との関係についての質疑があり、現状ではどの国も4年生の学生はUIAを受けられない旨の確認があった。

(b)JABEEの作品等の保管の問題、認定証は誰が出すのかといった管理・運営の問題から、JABEEは工学技術者教育であって、そのJABEE教育がデザインが中心となる建築家教育(UIA)とどのように関連するのか、といった根本的問題が話題に上がった。

④次に中国の李武漢理工大学教授より中国の建築デザイン認定制度の説明があった。1996年3月までが旧制度、1997年から4大学が新制度の認定を受け、「工学」から「建築学」へ移行するとともに4年制から5年制に学部が変更した旨の報告があった。

⑤引き続き尹成均館大学教授より、韓国の建築学教育の現況についての説明が行なわれた。韓国ではすでに2002年から一部の大学で5年生教育が開始された。そして2003年に政府と学会が一体となって建築教育認定システムの開発研究が行なわれた。特に成均館大学では任教授がスタート時より中心メンバーとしてこの開発プロジェクトに参加してきた経緯があり、2005年には自国による制度認定が設立されたのである。現在、2006年度より3大学が認証準備中であり、成均館大学は2007年度認証に向けて準備中とのことである。具体的には成均館大では工学部からデザインの分野を独立させ、1学年定員90名の建築学科学学生を新しく出来る建築デザイン系に51名、そのまま工学部に残る建築システム系に39名と分けることとした。大学院との関係は5年生を基本とし、その中身を3、5年+1、5年、4、5年+1、5年の2種類があり、デザイン系は5年制を卒業して2年後にUIAの資格審査を受けることができるということに決定したと報告があった。昨年私達が成均館大学校を訪問したときも、この制度に対応する為に校舎の増改築が盛んに行なわれていた。

⑥最後に鄭台湾科技大学教授より台湾の建築教育の現況についての報告がなされた。台湾で建築学科のある国立大学は2校で、他は全て私立大学である。教育認定制度については韓国、日本よりも遅れている。特に自国で認定制度をつくることは難しい面があり、検討中ではあるが進んではいない。現在台湾には4年制と5年制の建築学科があるが、5年制の私大は4年制に移行しつつある

との興味ある報告があった。この流れは4年制を5年制に移行しようとしている他の国とは逆行するものであり、その主な理由としては認定制度が定まっていない台湾では学生達にとって5年制は時間的にも経済的にも1年余分にかかり、負担の割りに利点が見えないことに原因しているとのことである。

⑦以上の報告の後にフリートーキングに入った。主な発言を上げれば

(a)中国と韓国は共に4年制の建築工学科を残しつつも、5年制のデザイン系の建築学科を創って UIA 認定制度に対応するようにスタートしている。台湾も認定制度は遅れているが、5年制のデザイン中心の建築設計学院がある。しかし日本は現在のところ4年制がそのまま続いているとの確認があった。

(b)5年制にしたときの1年増えた分は何を教えるのかが話題になった。成均館大の例では3年まで建築、4年で都市、5年で総合と位置付けている由説明があり、中国も同様の考え方をしているとのことである。

(c)学部と大学院の関係が話題に上がり、4年+2年の他に、5年+1年、5年+1.5年、4.5年+1.5年等、現在4年制から5年制に移行しつつあることもあって、種々のケースが報告された。

(d)日本のようにデザイン、計画研究、歴史等に分かれているのに対して、今後設計中心の大学、大学院に移行ということになると、大学院に入って設計中心の建築家になりたいと考えている学生はよいが、研究者として論文を志望する学生の対応に苦慮しているとの問題も上げられた。

現在、建築家資格の国際相互認定制度に向けて世界が大きく動いていること、東アジアにおいても情勢が刻々と変化していることを直接相互に把握しあうことができ、大変意義深かった。

#### 「フィールドワーク」

都市建築のフィールドワークは初日のシンポジウムが終わった次の日より15日までの9日間、昨年度成均館大に参加した大学院生を中心に、更に中国からの留学生2名と韓国からの留学生2名を加えた神奈川大生16名によって、12名の各国参加学生をサポートして東京横浜を中心とした伝統的な都市から現代的な建築まで幅広く視察し、スケッチ、写真撮影をしながら同行学生と交流を行い、日本の景観を深く理解した。昨年度は成均館大所有のバス1台で全員移動することができたので、時間も経費も少なくすんだが、今年は個別に電車を利用して移動するので大変だったが、事故もなく無事に

済んで安心した。

#### 『おわりに』

今回の5大学におけるシンポジウムは参加者にとって実に有意義なものであった。終了後引き続いてこうした交流を続けていくことが重要であることを確認し、早速次回には中国での開催を検討することとし、今年度中に幹事が集まって内容を検討していくこととした。また、長く学術研究交流を続けていくには教員だけではなく、大学院生を中心とした若い世代の学生や留学生の積極的な参加を促すことが重要であることも体験を持って確認された。

アジアにおける建築デザイン教育の現況と課題は各国大学間で学部・大学院の教育制度の変革の時期にあたり、認定制度を中心とした共通の問題と、各国各大学の差異性が確認された。参加者全員が建築デザイン教育のテーマはお互い今後とも密接な連絡を取り合いながら、引き続き情報交換を行なっていく必要があることを痛感したのである。

参加大学が増えると、お互いの学年暦や夏季休暇の違いがあつて、開催時期の調整が難しくなる等の問題も新たに生じた。

2回の建築系交流のなかで最も痛感したのは神奈川大に現在交流用の施設がないことである。いくつかの大学の学生たちが一箇所に数日間泊り込んで、1つの課題に取り組むことができたならば、どんなに研究教育効果上がるのか。よその国に出かけていくと交流関係のスペースが充実していて実にうらやましい。国際交流事業が本格的に動き出したわが大学も、是非ハード面の充実を図るべく、交流施設を早急に実現していただきたい。



フィールドワーク：横浜赤レンガ倉庫前にて